氏名・（本籍）	高田　佳輔（愛知県）
学位の種類	博士（社会学）
報告番号	甲　第130号
学位授与年月日	2017（平成29）年３月19日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年４月１日文部省令第９号） 第４条第１項該当
論文題目	オンラインゲームが現実世界の対人関係に及ぼす影響の量的・質的検討
審査委員	（主査）村上　　隆 辻井正次 松谷　　満

論文審査概要および審査結果

１．論文概要

本論文は、オンラインゲームの１つであるMassively multiplayer online role-playing game（MMORPG）を対象に、そのゲームをプレイする経験が、現実の人間関係に及ぼす影響を検討したものである。著者は当該分野における過去の研究をレビューした上で、現時点での未解決の問題として、（１）一般に、ゲームプレイヤーの現実の人間関係が希薄であるという事実は明らかにされているものの、それがプレイヤーにゲーム参加以前から存在するものか、ゲームをプレイしたことの直接的影響であるのかが不明であること、（２）ゲーム活動の内容自体を対象とした研究が少なく、あっても、活動内容の多様性まで意識したものとなっていないこと、の２点であるとし、その解明を目指した。これらは、オンラインゲーム研究の土台となる基礎的研究としての意義をもつものであるとされている。

本論文は５章から構成されている。第１章「序章」では、先行研究のレビューと上記の２つの問題の詳細な定式化がなされている。第２章「オンラインゲームのプレイングが現実の対人関係に及ぼす影響の検討」は、上記（１）の問題が、複数の量的調査データによって検討されている。第３章「MMORPGの仮想世界における活動の研究」では、参加観察による質的調査により、MMORPGの活動内容を記述し、前記（２）の研究上の空白を埋めることが試みられている。第４章「仮想世界内の集団活動における集団機能の検討」は、第３章と同じ参加観察のデータから、ゲーム内における対人関係の特徴が明らかにされている。第５章「総合的考察」では、研究全体を通じて与えられた、最初に定式化された２つの問いへの答えが学術的貢献として記述され、残された問題について論じた上で、本研究の社会的貢献についてまとめられている。

本論文で示された主要な結果は以下のように要約される。

1．ゲーム参加以前の人間関係特性を３次元の愛着特性によって定義し、現在の対人関係の質と量を４次元のソーシャルサポート受容と対人関係頻度で測定したところ、それらの間には既に高い相関関係が存在し、この点は、先行研究が既に示していたとおりである。しかし、愛着のレベルを統制した重回帰分析の結果。MMORPG のみならず、課金型モバイルゲームについても、それらをプレイすることが、現実の対人関係に負の効果をもつことが示された。さらに MMORPG は課金型モバイルゲームよりもその効果が大きいが、それは MMORPG のもつ仮想世界の影響であると解釈された（第２章）。

2．MMORPG の仮想世界における集団行動はさまざまな能力が要求される精緻なものであり、その内容は、集団か個人かという活動形態、メンバーが固定的か流動的かという集団の形態、活動の難易度の３つの要因によって影響されていることが明らかになった（第３章）。

3．特に、構成員が流動的なケースにおいて、ゲームの仮想世界内の集団活動に要求される能力を質的に分析した結果、それらが、それぞれ３層からなる下位カテゴリーをもつ「合理的問題解決能力」と「チームワーク能力」に分類されることが示された。この２つの能力は、三隅二不二によるリーダーシップ理論における P 機能と M 機能と解釈されるとともに、成員が流動的である MMORPG の活動は、リーダーとフォロワーの役割が固定されないまま、各成員が状況に応じてそれぞれの役割を分担しながら、集団に働きかけている状況が明らかにされた（第４章）。

これらの成果の一部は、２編の査読つき学術誌掲載の論文として刊行されていることを付記する。

２．論文評価

以上のような研究結果について、（１）MMORPG の対人関係への影響を示す際に用いられたモデルの適切性、（２）質的データからのカテゴリー抽出にあたっての信頼性の確保、（３）リーダーシップ理論に関する最近の展開への言及の不十分性、（４）研究成果の社会的貢献に関する議論の、過度の慎重さ、（５）本研究で用いられた研究法の他分野への転用可能性への言及不足、（６）仮想世界における人間関係の経験が、現実の人間関係スキルに及ぼす影響が不明、といった問題点が指摘された。

そうした問題点はあるものの、本論文が世界的にも研究の少ない、仮想世界をもつゲームプレイの対人関係への影響に関する研究を、心理学と社会学の両面からのアプローチで一定レベルまでなしとげた功績は過小評価されるべきでない。その点で、本研究には高いオリジナリティーが認められるのみならず、新たな研究領域を開拓したものとみなすこともできることは、審査員が一致して認めた。

３．口頭試問結果

2017年１月13日に口頭試問を行った。上記の問題点について、各審査委員から質問したが、論文提出者は、その多くについて認識しており、おおむね適切な応答を行った。

４．論文審査結果

以上を総合して、本論文が課程博士（社会学）の学位を授与するに値すると認める。